

めようと、仏教に心の支えを得んとする姿勢がより鮮明になり、仏教用語が詩語として多用されているのがこの期の作品の特徴とうつつる。

そして二点目は一点目と深く関わるが、死期の近い事を自覚しつつ、我が日々の謫居生活に何の好転も見出せないことから来る諦念、もしくは意識的にそうしようとする「則天去私」とも言うべき心情に裏打ちされた詠作姿勢が見られる点である。大曾根章介氏の言われる「現世の苦惱を払拭し超俗悟脱の境地に近づこうと真摯な努力をしながらも、遂に果すことの出来ぬ弱い人間の姿が現れている。」や「心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものといえよう」と指摘されている事が主にこの期の作品を指しているものと思われる。

ここでは「官舎幽趣」「偶作」二作品を取り上げ作品論を展開する。

## 第二部 「編纂事情考」

菅原道真の太宰府謫居時代に詠作された作品は巻頭の「自詠」から巻尾の「謫居春雪」まで三十九首残されている。それらの作品は今までほぼ制作時順に配列されていると考えられて来た。

今回取り上げて考察を試みた作品以外を含む全作品の注釈をし終えて見えて来たのは、概ね、制作時順に配列の方針を取りつつも、そこに菅原道真の後世に自己の生き様を託そうとする意図の基にこの『菅家後集』が編纂されているのではないかという事である。とりわけ巻尾の「謫居春雪」にそれが顕著であるように思う。